

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26330374

研究課題名(和文)「場としての図書館」の統合的研究：日本の新しい21世紀型図書館パラダイムの提唱

研究課題名(英文) An Integrated Study on "Libraries as Place": A New 21st Century Model of Paradigm for Japanese Libraries

研究代表者

久野 和子 (KUNO, Kazuko)

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80635524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、21世紀に入って評価が高まっている「場としての図書館」の価値とその展開を歴史的、実証的に解明している。すなわち、欧米の学際的、先進的な「場としての図書館」の先行研究と国内外における公立図書館、学校図書館、児童図書館における広範な実地調査、資料収集に基づいた統合的な研究である。これからの日本の図書館は、利用者の情報交流、生涯学習、市民活動、社会関係資本、豊かな日常生活を効果的に創出・支援できる「第三の場」となるべきことを提言した。

研究成果の概要(英文)：This study has historically and empirically elucidated the values and development of "Libraries as Place," which has been highly evaluated throughout the 21st century. It takes a holistic and integrated approach to combine the interdisciplinary and leading-edge studies on "Libraries as Place" preceded in the U.S. and Europe with a wide-range of field works in Japan and overseas. The results suggest that Japanese public libraries and school libraries should be local "third places" that are crucial for effectively creating and developing social capital, civic engagement, life-long learnings and civic information centers that enrich people's everyday life.

研究分野：図書館情報学

キーワード：場としての図書館 第三の場(サードプレイス) 社会関係資本 公共図書館 欧米の図書館 学校図書館 児童図書館 北欧の図書館

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代、インターネットが普及しはじめ、情報のデジタル化が進展する中、図書館消滅論が登場し、図書館の存在意義が強く問われることとなった。しかし、2000年代に入ると、世界中に新しい公立図書館が続々と建設され、逆に図書館という物理的な公共の場もつ価値と役割に注目が集まるようになった。

川崎が指摘したように、これまで図書館の伝統的な3つの価値(サービス提供、アクセス保障、プライバシー保護)とされていたものが21世紀に入って大きく揺らぐ一方、それとは対照的に物理的な公共の「場」が再評価されている。多種多様な人々や情報の対面的な出会いと交流のある、非商業的で身近な公共の場として、公立図書館への社会的期待は大きな高まりを見せている。その期待に応えるため、現在、様々なサービス実践や新しい図書館経営が模索されているが、最も肝要な理論的基盤づくりが十分になされていない状況にある。

(2) アメリカの図書館研究を牽引するウィーガンは、「利用者の生活の中における図書館」という、従来の管理者側の視座と異なる、下からの批判的視座の採用を提唱した。そして、「場としての図書館」研究は、「利用者の生活」という下からの視点と、現在学術的、社会的に広く注目されている「場」という研究課題を得たことによって、学際的な新しい研究方法と批判的な解釈を展開することとなった。川崎は、アメリカの図書館・図書館史研究を総括し、新しい第4世代の研究の一つとして「場としての図書館」研究を取り上げ、その学術的な位置づけと重要性とを指摘した。

(3) アメリカの政治学者ロバート・パットナムは、公立図書館が社会関係資本を効果的に創出、蓄積しうることをフィールドワークによって実証的に明らかにした。公立図書館は社会関係資本の創出にもとづく社会的弱者の支援や地域活性化に多大に貢献しうることを示唆された。そして、アメリカの社会学者レイ・オールデンバーグの「第三の場」は、社会関係資本を効果的に創出・蓄積する場として現在世界的に高く再評価されている。久野は、日本の図書館界に初めて「第三の場」を紹介した。現在、少子高齢化が進む日本において、地域活性化、町づくりのために「第三の場」としての図書館に大きな期待が集まっている。しかし、「第三の場」について一般的に誤解されている部分が多く、本来の意義や特徴の再確認が必要とされている。

## 2. 研究の目的

本研究では、上述の欧米の新しい「場としての図書館」研究や川崎の先行研究に基づい

て、先進的な図書館の現地調査をおこない、新たな図書館の役割と価値を理論的、実証的に明らかにする。具体的には、上述の3つの基本的価値に代わる「場としての図書館」の価値とその展開を歴史的、実証的に追及することを目的とした。

ただし、従来からの個別実証的な研究ではなく、現在の先進的な図書館における多様なサービスや「場」としての利用状況、運営方針、理念などを実証的に踏まえた上で、俯瞰的に解釈するホリスティックな理論を提出する。また、過去における「場としての図書館」の実態を実証的、全体的に把握する歴史的研究もおこない(川崎)、より重厚かつ統合的な研究を目指す。

最終的に、現代社会におけるこれからの「場」としての図書館のあり方についての理論的基盤を構築し、新しい図書館パラダイムを日本において提唱したい。

## 3. 研究の方法

本研究は理論的研究と実証的研究とを統合した研究である。理論的研究としては、学際的、批判的な研究方法を採用し、日本における新しい第4世代の研究を試みる。

実証研究としては、「利用者の生活の中における図書館」および「場としての図書館」を検証すべく、国内外の先進的な図書館における実地調査を幅広く実施する。

## 4. 研究成果

(1) 1年目は、スタート時において、久野が欧米の「場としての図書館」研究の研究意義、研究方法、特色などについて具体的な概念や研究例をあげて検討し、その高い学術的価値を明らかにした論文をまとめ、本研究の理論的研究の基盤づくりをおこなった。連携研究者の吉田は北欧の公共図書館における対話・会話の場の創出とその意義を紹介する論文を発表した。年度末には、久野、連携研究者の川崎、吉田ほかとの共著で研究書『図書館トリニティの時代から揺らぎ・展開の時代へ』を刊行した。本書において、川崎は図書館トリニティが揺らぐ現代において、新しい第4世代の図書館研究が生まれていること、またその歴史的・学術的な意義を明らかにした。久野は、川崎の研究を踏まえ、「第三の場」を中心として第4世代の「場としての図書館」研究を概観し、その内容や意義を明らかにする論文を著した。

実証研究としては、9月に北米西海岸の公立図書館、学校図書館などを訪問した。シアトルでは、奇抜な建物が世界の注目を集めた新シアトル中央図書館を視察した。当図書館は大規模すぎて「第三の場」たり得ないとする先行研究に対して、時間的・空間的に限定化、多元化された「第三の場」が豊富に創出されている可能性を確認した。また、シアトル郊外にある「第三の場」を標榜する書店と隣接する公立図書館との連携・協力体制を確

認することができた。ロスアンジェルでは、中央図書館で川崎が取り組む「場としての図書館」の歴史的研究のための一次資料の収集をおこなった。分館の現地調査では、貧しい移民たちが、居心地よい「第三の場」として日常使いをしている図書館があった一方、多くのホームレスがインターネットを利用するため長時間滞在し、一般住民の利用の妨げとなっていた図書館もあった。郊外の「第三の場」を標榜していた学校図書館では予算や人員のない中、校長と司書教諭が協力して、図書館を利用した授業や生徒の居場所づくりに熱心に取り組んでいた。2月にはイギリスのアイデアストアを訪問し、世界的に注目されている「第三の場」の理念を取り入れた先進的な運営理念・方法や画期的サービスを確認したが、他方で職員の採用・研修に大きな課題があると感じた。3月には伊万里市民図書館を実地調査し、日本においても地元住民の「第三の場」としての図書館が具現化されていることを確認した。一方、武雄市図書館については、「第三の場」を経営理念として掲げるスターバックス・コーヒー店や書店を館内に設置し話題を呼んだが、オールデンバーグが危惧した消費資本主義的な場となっており、多くの課題が見受けられた。

(2) 2年目は、8～9月にイタリアの先進的図書館を訪問した。新しい図書館は児童図書館に大きな力を入れており、専門職員、スペース、資料、サービスの充実ぶりに目を見張った。その後、北欧3国の図書館を訪問し、イタリア以上に児童図書館が充実していることを確認した。ノルウェーでは、「場としての図書館」プロジェクト研究の主宰者の一人である Aabo 教授と懇談し、他の研究者も交えて、意義深い議論をおこなうことができた。スウェーデンでは日本人司書と、フィンランドでは話題のライブラリ 10 の館長らと議論した。さらに図書館では多くの職員や利用者らとゆっくり会話をすることができ、北欧の図書館は、まさに吉田が指摘したように対話と会話の場であることを実体験した。また、吉田の研究対象であるデンマークを3月に訪問し、その図書館理念と利用実態を確認した。特に、新オーフス図書館は、巨大な図書館であるが、行政ワンストップサービスや会話を促進するスペース作り、遊園地・ゲームセンターのような児童図書館など、最先端の「場としての図書館」の具現化がみられた。

現地調査をもとに、理論的研究も進展し、久野は、特に北欧の図書館調査を通して、「第三の場」がこれからの図書館の理想的なあり方と考え、国際フォーラムでは、「第三の場」としての図書館の意義と役割について口頭発表をおこなった。また、久野は論文「フィンランドにおける第三の場（サードプレイス）としての図書館」、視察報告「新ヘルシンキ中央図書館とその構想」、吉田はデンマークの図書館についての論文をまとめた。一

般講演も積極的におこない、実地調査で得た具体的な事例を紹介するとともに、先進的理論や「第三の場」について紹介・解説した。

(3) 最終年度は、8月に北米東海岸の図書館を現地調査した。シカゴではパットナムが、「第三の場」の特徴をほぼ満たし、社会関係資本を創出していると指摘したニアノース分館の現地調査をおこなった。そして、本図書館が「第三の場」として機能しうる最も大きな要因の一つは、司書と利用者、利用者同士の会話やコミュニケーションにあることを確認した。また、アメリカ図書館協会(ALA)の本部において、国際部長から「場としての図書館」についてALAの考えや実際の取組について話を聞いた。ボストンでは川崎の歴史的研究に関わるボストンアセニウムやボストン公立図書館を現地調査し、情報収集をした。隣接する公園や新館とともに住民が集う公共空間としての図書館の役割と機能について新たな認識を得ることができた。ニューヨークにおいても、ニューヨーク公共図書館と隣接するブライアント公園とが統合的に創出する場、公共空間について、「第三の場」を包み込む、次元の異なる理論構築の必要性を感じた。

その新しい理論的研究の試みとしてアンリ・ルフェーブルの空間論に着目し、9月の国際フォーラムにおいて口頭発表をおこなった。11月にはパリの公立図書館、大学図書館、ミラノの新しい先進的な公立図書館を現地調査し、「第三の場」、またそれを包摂する「公共空間」としての図書館の機能、役割について検証した。

(4) 川崎は、広範な一次資料の発掘によって、アメリカ公立図書館における新聞メディアと空間(場)との関連を明らかにし、図書館の理念と実践について批判的、実証的に検証した第4世代のアメリカ図書館史研究を完成させ、論文や図書にまとめ発表した。

久野はその専門分野である学校図書館と児童図書館について、日本における「第三の場」としての歴史的展開と果たした役割、また、これから果たすべき役割、機能について提起した2件の論文を著し、共著としてそれぞれ図書を刊行予定(掲載決定)である。また、「第三の場」としての図書館について、新しい第4世代の図書館研究となる単著の図書を刊行する予定(刊行日未定)である。

今後の展望としては、「第三の場」を基盤とし、多様な場を包摂する「公共空間」としての図書館について先進的な研究を進めていく予定である。すでに、ノルウェーの「場としての図書館」プロジェクトの Aabo 教授らの研究協力と科研費(2017～2019年度)の助成を得て、新たな研究プロジェクトを開始している。

(5) 国内外の先進的な図書館を現地調査し、

「第三の場」が包摂的、多元的に具現化されていることを確認した。図書館の「場」としての理想的モデルとして、非商業的、自由、平等、多様性、会話、ホスピタリティ、信頼、出会い、つながり、楽しみ、情報交換、互助、民主主義、市民教育、生涯学習、社会関係資本などをキーワードとする「第三の場」(サードプレイス)はまさに相応しいと考えられる。また、その成否を分けるもっとも重要な要因は、地域住民の「第三の場」としての図書館の真価を發揮させることのできる優れた図書館職員が存在であると結論した。

(6)本研究によって、現代社会における新たな図書館の役割と価値を歴史的、実証的にある程度明らかにすることができたと考える。これからの図書館のあり方は、資料・情報提供を基盤として、生涯学習、市民活動、社会関係資本、地域活性化、住民の豊かな日常生活を効果的に創出・支援できる、地域の「第三の場」となることである。「第三の場」を核とした「場としての図書館」を新しい図書館パラダイムとして提唱したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

川崎良孝「ウェイン・ウィーガンドと文化調整論：図書館史研究の第4世代」『図書館界』(査読有)68(3), 2016年9月, p. 200-214.

久野和子「フィンランドにおける「第三の場」(サードプレイス)」(third places)としての図書館」『神戸女子大学文学部紀要』(査読有)49, 2016年3月, p. 101-114.

川崎良孝, 川崎智子「日刊新聞とアメリカの大規模公立図書館：19世紀末から20世紀初頭を中心として」『図書館界』(査読有)67(5), 2016年1月, p. 292-308.

久野和子「新ヘルシンキ中央図書館とその構想」『カレントアウェアネス-E』(査読無)295, 2015年12月24日, E1749

吉田右子「自己との対話・他者との対話：21世紀のデンマーク公共図書館がめざすもの」『図書館雑誌』(査読有)109(4), 2015年4月, p. 220-222.

川崎良孝, 川崎智子「日刊新聞,階級,図書館の空間配置：19世紀後半のアメリカ公立図書館を例に」『図書館界』(査読有)66(6), 2015年3月, p. 362-380.

久野和子「新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」("Library as Place")研究：その方法論を中心にした考察」『図書館界』(査読有)66(4), 2014年11月, p. 268-285.

久野和子「「第三の場」(third places)としての図書館(発表1,シンポジウム「人と人,人と資料が出会う場としての図書館」<

特集>第55回研究大会)」『図書館界』(査読有)66(2), 2014年7月, p. 98-103.

吉田右子「対話とエンパワメントを醸成する21世紀の北欧公共図書館」『現代の図書館』(査読有)52(2), 2014年6月, p. 112-120.

[学会発表](計10件)

久野和子「第三の場(サードプレイス)としての図書館」(招待講演)京都図書館大会, 2017年11月28日, 埼玉会館(埼玉県さいたま市)

久野和子「第三の場(サードプレイス)としての図書館」(招待講演)北海道図書館大会, 2017年9月7日, 札幌学院大学(北海道江別市)

久野和子「空間(SPACE)としての図書館」京都国際図書館フォーラム, 2016年9月3日, 京都大学(京都府京都市)

久野和子「第三の場(サードプレイス)としての図書館」(招待講演)京都図書館大会, 2016年8月8日, 同志社大学(京都府京都市)

久野和子「図書館が第三の場を包摂することの意義について」京都国際図書館フォーラム, 2015年8月8日, 京都大学(京都府京都市)

吉田右子「なぜ北欧の公共図書館ではおしゃべりが解禁になったのか」中部図書館情報学会総会, 2015年6月6日, 愛知学院大学(愛知県日進市)

久野和子「第三の場(サードプレイス)としての図書館」(招待講演)神奈川県図書館協会総会, 2015年4月22日, 神奈川県立図書館(神奈川県横浜市)

川崎良孝「図書館トリニティから揺らぎ・展開の時代へ」上海市図書館学会, 2015年3月9日, 上海図書館(中国・上海市)

吉田右子「なぜ北欧の公共図書館ではおしゃべりが解禁になったのか」日本図書館協会第100回全国図書館大会, 2014年11月日, 明治大学(東京都千代田区)

久野和子「場としての図書館：女性閲覧室についての考察」京都国際図書館フォーラム, 2014年8月11日, 京都大学(京都府京都市)

[図書](計8件)

木幡洋子編著『これからの学びと学校図書館：情報時代を見据えて』風間書房, 2017年9月, 240p. (久野和子, 木幡智子, 杉浦良二, 土居安子, 江良友子, 永井悦重, 大崎裕子, 森田英嗣, 塩見昇, 山本昭和著)(掲載決定)

川崎良孝・吉田右子編著『現代の図書館・図書館思想の形成と展開』京都図書館情報学研究会, 2017年8月, 265p. (久野和子, 福井佑介, 中山愛理, 三浦太郎著)(掲載決定)

ウェイン・ウィーガンド著, 川崎良孝訳

『生活の中の図書館：民衆のアメリカ公立図書館史』京都図書館情報学研究会，2017年3月，429p.

川崎良孝 『アメリカ大都市公立図書館と「棄てられた」空間：日刊新聞・階級・1850-1930年』京都図書館情報学研究会，2016年11月，267p.

川崎良孝編著 『図書館トリニティから揺らぎ・展開の時代へ』京都図書館情報学研究会，2015年2月，497p. (久野和子, 福井佑介, 中山愛理, 嶋崎さや香, 安里のり子, 呑海沙織, 小林卓, 高嶽裕樹, 北村由美著)

ロバート・エリス・リー著，川崎良孝・鏑純香・久野和子訳 『アメリカ公立図書館と成人継続教育：1833-1964年』京都図書館情報学研究会，2014年12月，215p.

クリスティン・ポーリー，ルイーズ・S.ロビンズ編，川崎良孝・嶋崎さや香・福井佑介訳 『20世紀アメリカの図書館と読者層』京都図書館情報学研究会，2014年10月，351p.

#### 〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

#### 〔その他〕

ホームページ等  
久野和子研究室  
<http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/semi/kuno/results.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

久野 和子 (KUNO, Kazuko)  
神戸女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：80635524

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

川崎 良孝 (KAWASAKI, Yoshitaka)  
京都大学・教育学研究科・名誉教授  
研究者番号：80149517

吉田 右子 (YOSHIDA, Yuko)  
筑波大学・図書館情報メディア研究科・教授  
研究者番号：30292569

##### (4) 研究協力者

( )